

(14) 附属幼稚園

ア 設置の趣旨（目的）及び組織

i) 本園の任務

a 先導的な幼稚教育施設として

教育関係諸法規，幼稚園教育要領に基づき，心身の発達に応じた普通教育を実践するとともに，多様な教育課題に取り組み，地域の幼児教育を先導する。

b 教育実習園として

上越教育大学学生の教育実習（観察・参加・実習）の場として学生の指導に当たる。

c 研究園として

大学及び附属小・中学校と一体となり，教育理論及び実践に関する研究を行う。さらに，幼児教育の立場から研究・実践し，成果を広く発信する。

ii) 組織

附属幼稚園は，園長，副園長，教諭3人，養護教諭，非常勤講師2人，教育補佐員（特別教育支援員），教育補佐員，事務職員2人，保育支援員（預かり保育担当）3人により構成される。

iii) 教育目標

「元気な子ども やさしい子ども 考える子ども」

イ 運営・活動の状況

i) 教育研究・管理運営の状況

a 教育課程改善研究の推進

令和元年度から「子どもを支える保育～評価を通して～」をテーマとした研究を立ち上げた。

1) 研究主題

「子どもを支える保育～評価を通して～」（1年次）

2) 研究目的と内容

教師が整えた環境や行った援助が子どもにとって望ましい発達を促すようなものになっていたのかどうかを評価する方法を探った。

本園では，評価を「幼児の発達する姿に照らして，教師が行う環境構成や援助が適切かどうかを振り返り，改善を図っていくこと」と捉えた。保育記録やカンファレンスの持ち方を中心に，保育を振り返り，保育を評価する仕組みについて検討を重ね，整えることを試みた。

3) 令和元年度幼児教育研究会の開催（第27回幼児教育研究会 10月9日）

幼稚園・保育園に加え小学校や教育行政関係機関からも大勢の参加者があり，総勢214人の参加が得られた。今年度の特徴は，保育関係者の割合が高かったことである。

午前中の公開保育では，保育室，遊戯室，出会いの広場などの屋内空間と，園庭や園舎周りの屋外空間の様々な場所で，仲間とかかわり，主体的に遊ぶ幼児の姿を公開した。参会者からは遊びに集中する幼児の姿や，幼児の自主性を引き出す教師の援助について高い評価を得た。研究会参加者から得たアンケートには，「子どもの主体的な姿を支える教師の関わり方が参考になった」「初めから型を決めず，手作りで評価も作り上げていくプロセスがとても意義があると思った。」などの好評価を得た。

分科会では，3，4，5歳クラスそれぞれの保育の様子や教師の援助，保育環境等について，幼

稚園教諭，小学校教諭，保育士，行政関係者，研究者等，各々の立場から少人数で意見交換を行うことができ，好評であった。

午後は，会場を大学講堂に移し，パネルディスカッションを開催した。パネリストには，お茶の水女子大学文教育学部人間社会科学科教授であり，お茶の水女子大学こども園園長 宮里暁美氏，上越市立保育園長会会長 藤田芽美子氏，新潟県私立幼稚園・認定こども園協会副理事長 石田明義氏を招いて，それぞれの立場，経験から話しを伺った。

4) 研究紀要の刊行

3月に令和元年度研究冊子「子どもを支える保育～評価を通して～（1年次）」を刊行した。県内の幼児教育関係施設及び機関，上越地域の小学校に配布した。

b) 管理運営の状況

1) 教職員や保護者等による学校評価を生かした学校運営改善の取組

年度始めにグランドデザインを作成し，全保護者に配布するとともに，「ふぞくフォーラム（5月）」で園運営について保護者向けに説明をした。1月には保護者と教職員による学校評価を行った。学校評議員会を令和元年5月29日及び令和2年2月26日に開催した。保育や研究の成果及び学校評価の結果を示し，協議を行うとともに，園の活性化のために重点的に取り組んできていることについて協議した。今後の取組について様々な角度からご示唆いただいた。評議員の意見を次年度の改善に反映させたい。

2) 教育環境の整備と安全管理の徹底

幼児の豊かな体験の場として充実した環境となるように，見通しをもち，計画的，継続的に整備を行っている。今年度はグラウンド南東側に位置する築山と園舎南側の園庭の改修を行った。子どもの遊びや雨風で土砂がけずれていたところに土砂を足し，形成することで安全に遊べる環境が整った。また，年度末に園庭に幼児が遊びに活用する小屋を設置した。さらには，防犯カメラを刷新し，園全体が夜間も通じて教務室から監視できる環境が整った。

本学学生のボランティアによる園庭の整備も，昨年に増して充実した。また，保護者ボランティアによる春と秋の年2回の環境整備作業は幼児の遊びの充実のためには欠かせない行事として協力を依頼している。

3) 安全確保の取組

警察や消防署の協力を得て，火災，地震，不審者侵入等を想定した避難訓練を年6回実施した。特に東日本大震災の教訓を踏まえ，地震の震度に合わせた対応などを徹底し，訓練を実施した。防災に関し，保護者向け緊急連絡メール配信システムを継続するとともに，緊急時に関する申し合わせを保護者に徹底した。また，保育環境の安全確保に向けた，環境整備日・安全点検日は毎週定期的に設けている。さらに，PTA交通安全委員が中心となって，登降園の仕方や駐車場利用の約束などを徹底する活動を実施し，安全への意識啓発に努めている。

4) 本園の魅力に関する調査結果に基づいた積極的なPR活動等

保護者アンケートにおいて，ほとんどの保護者が教育の質のよさに満足している結果を踏まえ，教育のよさについてパンフレットを作成して配布するなど，積極的なPRに努めた。また，天候の良い時期には，毎週金曜日を「にこにこ DAY」に設定し，未就園児をもつ保護者に園庭開放した。さらには，年間を通じて園のホームページとフェイスブックにより，随時，幼児の様子や園の様子を発信した。

ii) 附属幼稚園の活性化・充実のための取組

a 保育の充実を図る取組の推進

- 1) 毎日の保育後に行う学級ごとの振り返りタイムや毎週水曜日に行う「水曜どうでしょう」の情報交換、研究推進委員会を通して保育改善や研修に継続的に取り組んだ。
- 2) 幼年教育コース教員を主とした大学教員など園外指導者の協力を得ながら専門的な見地を生かした研究や研修を進め、幼児の学びを見とる力や実践的指導力の向上を図った。
- 3) 幼児の学びや環境構成について履歴を集積し、保育や指導計画の改善に生かした。

b 家庭との連携を深める取組の推進

- 1) 登降園時や連絡帳等を活用した情報交換をはじめ、各種たより等を通して保護者との連絡を密にした。
- 2) 保育参観日と教育相談日を毎月1回実施。運動会や祖父母参観等の園行事には遠方の親族も多く参加され、幼稚園への理解を深める機会となった。
- 3) 年2回の「ふぞくフォーラム」(保護者対象)を実施し、幼児教育の重要性や園運営について理解を図るとともに、本園の保育のよさを共有する時間となった。

2回目は、大学の講堂と体育館を会場とし、「三附子どもの健康を育む会」を行った。保護者の参加率は9割を超えた。現保護者のライフスタイルに合わせたPTA活動にするため、PTA役員を中心に模索し、必要に応じてアンケートをとったり、協議したり、臨時保護者会を開催して説明するなど、即実践の改革を実行した。

c 大学・附属校との連携・協力の推進

- 1) 附属小学校1年生と幼児の交流活動を年間を通して4回行った。小学校への接続が円滑に行われるよう、双方向性のある活動展開を工夫した。
- 2) 学部1年生の教育実習と学部4年生等の幼稚園専修教育実習を受け入れた。
- 3) 幼年教育コース教員と研究協議会を行い、研究や運営等の課題について協議した。
- 4) 大学教員や英語教育専攻の学部生・院生の協力を得て、年長児と年中児を対象とした英語活動を毎月実施した。
- 5) 特別支援教育コース並びに同実践研究センターと連携し、幼児の発達相談環境を整えた。入園選考時にも適切なアドバイスを受けることができた。さらには、特別支援教育コースと連携を図り、支援の必要な幼児とその保護者に適切な援助や継続的な指導を実施できた。
- 6) 学部生・院生のボランティアによる保育援助、環境整備の体制が充実した。また、学生のサークル活動を幼児のお楽しみや祖父母参観日の余興として活用し、幼児と学生の双方にとって価値ある体験となった。学生のOJTに直結した。
- 7) 大学の施設を遠足、PTA活動、研究会等で積極的に活用した。

d 近隣の幼稚園・保育所、教育委員会との連携

- 1) 上越市学校教育研究会幼稚園部会及び生活科部会の部員に本園の研究会のパネルディスカッションを公開した。
- 2) 上越市福祉健康部保育課と連携し研究会参加者を募った。

ウ 優れた点及び今後の検討課題等

i) 教育研究・管理運営の状況の視点から

a 教育実習の受入れについて

附属園として質の高い教育実習指導を行うことができ、今年度の反省点をもとに改善に努める。

b 大学教員との共同研究等の推進について

幼児の見取りや研修方法等に関する評価や特別支援教育等についての実践的研究を推進する。

ii) **附属幼稚園の定員充足等の視点から**

a 園の積極的なPR活動等

フェイスブックやホームページ等により、当園の質の高い教育について積極的にPRする。年間を通じた園庭開放の際に、園の魅力を発信するとともに、入園志願者数の増加につながる働きかけを工夫する。

b 教育相談の充実

幼児の困り感や保護者の子育てに対する不安に応じる教育相談の充実に努め、保護者が安心して預けられる保育の充実に一層の力を入れる。

c 預かり保育の充実

これまで以上に活用しやすい預かり保育にするため、利用申請の仕方や教材費の徴収方法について検討した。また、年間指導計画を作成し、今後一層の保育の質の充実に努める。